小１０　練馬区立開進第一小学校

指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

冬季休業中に記入

教科名	国　語

	指導方法の課題分析 （学習における児童の実態等）	具体的な授業改善策	改善状況 ◎○△ 特記事項
第１学年	・平仮名の読み書きが不十分で、文章の意味を正しく理解できていない児童がいる。また、設問の意味を読み取れず、記憶を頼りに思いつきで答えることもある。 ・一斉指導において、聞く力が弱く、自分ごとと捉えられない児童がいる。	・読み聞かせの時間を週に１回程度もち、読書を通して文章に慣れることで、豊かに想像する力を育てる。 ・文字の学習に年間を通して継続的に取り組む。 ・ハンドサイン等で反応したり、聞いたことを伝え合ったりする活動を、年間を通して入れていく。	
第２学年	・文章（「を」「は」「っ」など）を正しく書くことができなかったり、段落などのマスの使い方を正しくできなかったりする児童が多い。 ・友達の考えに対する自分の考えをもつための素地を育てたい。	・書いた文章を友達同士で読み合い、サイドラインを引いたり、感想を会話や付箋で伝えあったりする交流の場を多く設ける。 ・友達の発表に対してハンドサイン等で反応することを継続して取り組んでいく。	
第３学年	・１学期評価テスト（知識理解　漢字）では、７０％前後の正答率であった。現在の指導方法として、朝学習のドリル学習、毎日２文字ずつの宿題、小テスト前の練習をしているが、身に付いていない児童が３０％いる。	・評価テストでの正答率を８５％に上げる。そのために授業の導入で前日学習した漢字のミニテスト（ノート余白への書き取りと確認）をする。また、単元テスト前に単元に出てきている漢字の振り返りや書き確認をする。タブレットによる繰り返しの練習もする。	
第４学年	・根拠を基に自分の思いや考えを、言葉に表す力が不十分である。	・出した問いに対して、なぜそのように考えたのか、その根拠はどこにあるのかを考える時間を確保する。	
第５学年	・全体的に筋道を立てて文章を作る力に課題が見られる。登場人物や筆者の思いや意図をくみ取り、自分と重ね合わせて考えている児童が少ない。	・自分の考え等を書く時間を多く設ける。様々な問いに対して、自分と重ねさせて考えさせる発問をする。また、他教科でも、振り返りなど書く時間を設け、書くことに関して抵抗をなくしていく。自分の考えを交流し、書くことの楽しさを味わせていく。	
第６学年	・文章構成を捉えたり、要旨をまとめたりすることで、重要な箇所を自分で捉える力が身に付いてきている。ただ、語彙の少なさから、正確に意味を捉えきれていない児童も多く見られる。 ・日常生活で単語のやり取りで成立してしまうためか、文章を書く能力、原稿用紙の使い方等が身に付いていない児童が多い。	・音読の宿題で繰り返し文章を読ませたり、意味調べの時間をとったりすることで、語彙を増やしていく。 ・新聞づくりや作文などマス目のある用紙に文章を書かせることで原稿用紙の使い方を確認する。 ・自分の考えを書く際は、型などを提示しながら的確にまとめられるように指導する。	

小１０　練馬区立開進第一小学校

指導方法の課題分析と具体的な授業改善策

冬季休業中に記入

教科名	算　数

	指導方法の課題分析 （学習における児童の実態等）	具体的な授業改善策	改善状況 ◎○△ 特記事項
第１学年	・文章題では、問題を読み取る力の不足が原因で、正しく立式できていないことがあると考えられる。	・キーワードを整理しながら、繰り返し学習経験をさせ、多くの問題にふれ、身に付けさせていく。 ・文章題を図や絵で表し、視覚的に分かるようにする。	
第２学年	・時刻と時間を正確に読むことや長さや水のかさの量感、単位換算が苦手な児童が多い。	・生活場面の中で学習したことを生かせるように、日常的に時刻や時間、長さや水のかさを意識した活動を取り入れる。 ・自分の考えを友達に説明する機会を多く設定する。	
第３学年	・１学期評価テスト（思考判断）では、８０％以上の正答率であったが、足し算や引き算については６０％であった。文章題での式の立て方に課題がある。授業内では文章を全員で確認して問題に取り組んだり、宿題でドリル学習をしたりしている。	・評価テストでの正答率を９０％に上げる。そのために、文章問題で使われる数値や求めることの確認（クラスに応じて数値などに印をつける）をして、何を求めるのかを明確にする。また友達同士の問題作りを通して、問題に応じた式の立て方を考えたり、解答に対する説明をしたりする。	
第４学年	・既習事項を生かして、問題解決をすることが苦手な児童が多い。 ・解決の過程や結果を多面的に捉え、考察することに苦手意識をもつ児童が多い。	・答えを出すことだけを重視せず、なぜそのように考えたか、どうしてそのように言えるかを、図や既習事項などの根拠をもって表したり説明したりする時間を設ける。	
第５学年	・計算ができる児童が多いが、立式に困難が見られる児童が多い。問題把握がしきれずに立式に取り組んでいる児童が目立つ。問題文から数直線やテープ図など課題解決するためのツールを活用しきれていないことが原因であると考える。	・問題文を読み、自力解決の時間に数直線や図を使って解く時間を設ける。問題把握の時間を多く設けることで児童のつまずきを確認し、形成的に個別対応していく。	
第６学年	・既習事項が定着していない児童が多く、新しく学習する内容についていけない児童がいる。 ・文章問題を正しく読み取り、自分の考えを表現することに苦手意識がある児童が多い。	・単元に合わせて、それに関連する前学年までの学習内容を復習や計算を多くする時間を設ける。 ・図を丁寧に表したり文に表したりして自力解決する活動や、友達に説明したり友達の考えを読み取ったりする機会を多く設定する。	